# 織田信奈の野望 織田信包伝

大友親貞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

織田信奈の野望　織田信包伝

【Ｎコード】

Ｎ９４０５Ｔ

【作者名】

大友親貞

【あらすじ】

織田家の男子として転生した転生者は同じ時代を生きていた相良良晴とどう交わり戦国の世を生きていくのか？

# 織田信包誕生（前書き）

織田信包となった転生者の行く末はいかに

# 織田信包誕生

「ここはどこだ？」
私は見覚えのない部屋に戸惑っていた。
私は大学の講義が終わって家で戦国ゲームの「織田信長公の野望」をしていたはずだよな
と思いつつ声を挙げようとするが部屋には赤ちゃんの泣き声しか聞こえなかったのだ。
何故だと思い横を見ると女性が隣に寝ているので声を掛けようとすると。
その女性が目を覚まして、私の顔を見て微笑み話し掛けてきた。
「起きたの三十郎もう少ししたら父上に会えますよ。」
「父上？なんのことですか。そして私の名前は三十郎ではないですが。」と言いたいのだが声にならない、いや正確に言うと赤ちゃんの声しか聞こえなかった。
すると廊下から足音がして男性が入ってきた。
「よく産んでくれた土田御前。そこにいる赤子が三十郎か、儂に似て利発そうじゃ。しかしお前には姉や兄がおるよって家督は譲れん、お前には姉や兄を支え織田家の為に働いて欲しいと思っておる。まぁ赤子に言っても仕方ないがな。」
「そうですよ。まだ先のことではありませぬか。」
と夫婦で笑い合っているなか私は考えていた。
「えっ！三十郎というのは通称だよな。えっと織田家で三十郎は織田信包だよねということは私は織田信包ではないのか！！」
私が「織田信長公の野望」で織田家でプレイしていた時に信長の弟で紹介されてどういう武将か調べた時にそういう通称だったと思い出し、私は愕然とするのであった。

## 織田信包誕生（後書き）

ご意見や感想をよろしくお願い申しあげます

## 主人公設定（前書き）

1週間ぶりに更新させて頂きます。大友親貞と申します。
第1話は初投稿で色々と至らないところがあり大変申し訳ございませんでした。
それを踏まえてオリジナル主人公の設定と織田信包公について投稿させて頂きました。
これからも至らないところがあるとは思いますが暖かい目で読んで頂ければ幸いと思っております。

## 主人公設定

史実の織田信包公について
（生没年）
１５４３年～１６１４年
父（織田信秀）
母（土田御前？）
幼名は不明
通称は三十郎
初名は織田信良
法名は老犬斎

オリジナル主人公
転生前の名前　伊東義隆
設定は大学生で歴史が好き原作の主人公である相良良晴と同じ世界の日本人
性格は地味でおとなしい
趣味はゲーム（主に歴史もの）
口調は丁寧
　一人称は「私」
　二人称は「～殿」
身内には「～上」

作中の織田信包について
史実において、信長の生母の土田御前やお市の方と浅井三姉妹を自身の居城に招き入れたことから、信長と同母の兄弟ではないかと思いまして。
この小説では主人公の織田信包を織田信奈の同じ母親の姉弟としたいと思っております。

幼い時の呼び名については信包公の幼名は分からず、通称の三十郎としたいと思っております。
何故なら織田信包の兄である織田信勝も幼名は不明であり信包にオリジナル幼名を付けたら信勝にも付けないといけないと思い、それは良いのだろうかと思うからです。

## 主人公設定（後書き）

ご意見や感想をよろしくお願い申し上げます。

## 家族との初対面（前書き）

主人公が信奈や信勝といった家族との話です。
至らないことも有るとは思いますがあたたかい気持ちで読んで頂ければ幸いです。

## 家族との初対面

私はあれから考えてみました。
選択肢としては、私が生きていた元の世界に帰る方法を考えたのですが良案は浮かびませんでした。
何故なら、どうしてこの世界に来たかわからないことや今の私は赤ん坊であり自由に行動できるわけではなかったのです。成長しても見つかる保証も無いですし。
それならば、いっそのこと織田三十郎として生きてみようと思ったのです。
情報がないといろいろと困りますから、まず手始めとして情報を集めて整理する事にしたのです。
しかし現在赤ちゃんである私には人に話を聞いて集めることはできませんので他人の会話から情報を得ることにしました。
集まった情報は父上が織田信秀で母上が土田御前というゲームなどで得た知識だったのですが。
吉法師が女性であり、将来において織田家の当主になるらしいこと、勘十郎という兄上がいること、他に兄弟がいないことをさまざまな人の話から得ることできました。
参りましたね。この世界では織田信長公が女性だなんて驚きですよ。
他にも史実とは異なることが有るかもしれないですね。
そんなことに思いを巡らせてから数日後に父上が姉上と兄上を連れて来られました。
「吉法師に勘十郎この赤子がお前達の弟の三十郎じゃ。」
二人は私の顔をしげしげと見ると。姉上から
「わたしが吉法師よ、これからあんたはわたしの子分、わかった三十郎。」
いきなり何を言い出すかと思えば何もできない赤ちゃんに子分になれですか！。と思っていると

「きみがぼくの弟かぼくは勘十郎よろしくね、三十郎。」
と兄上がにこにこしながら話しかけてきました。
そして、私との対面を終えると二人は仲良く外に遊びに行きました。
すると父上と母上が話をしています。
「吉法師と勘十郎は仲が良いのう。
このまま姉弟仲が良いければ織田家は安泰じゃ、もちろん三十郎お前も入っておるぞ。」
「三十郎、お前の父上は気が早いですね。まだ喋ることのできない赤子に先のことを話すなんて。それにその時には、三十郎は赤子の頃のことなんか覚えてませんよ。」
「ただ言ってみただけの事。それに、いずれ儂自ら言って聞かせるわ。」
「頼もしいですわね信秀様」
「当たり前だ、儂は尾張だけにとどまる積もりはない。いずれは美濃や三河を平定して天下に織田ありと知らしめるつもりじゃ。そして、それを我が子達がどうして行くのか見届けるそれまで儂は止まらぬぞ。」
父上はそこまで考えていたのか、さすがは尾張の虎と言われた人だな、私も頑張らなくてはな、だが最大の問題は姉上と兄上だよな。
今は二人とも仲が良いがこれからどうなるか分からないし、史実では二人は対立して勘十郎の兄上は姉上に誅殺されるだよな。それだけは避けたいよなぁ。
せっかく家族になったのだし、その為に考えるとしましょうかね。

## 家族との初対面（後書き）

ご意見やご感想をよろしくお願い申します。

## 信包、竹千代に会う（前書き）

オリジナルキャラクターを出してみたいと思い投稿してみました。
いろいろと至らないこともあるとは思いますが暖かい気持ちで読んで頂ければ幸いです。

## 信包、竹千代に会う

あれから4年の月日が経ち、
私は5歳となりました。
その4年の間にいろいろな事がありました。

例えば、私の驚く顔がみたいということで姉上に木刀で振り回して追いかけられたり、
何故か兄上と一緒に女装することになったりと大変ながらも楽しい日々を送りました。

女装については思い出したくはありませんでした。

そして、私達に新しい家族が増えました。

父上が側室を迎えたそうなのです。

何でも、その人は姉上の乳母だった方だとかで姉上も非常になついてているそうなのです。

その義母上には娘がいるそうで幼名が勝三郎らしいのです。
信長の武将に勝三郎が通称で信長と義理の兄弟の武将がいましたね？
確か、池田恒興だったと思うのですが。
会ってみたいと思っているとその機会が巡ってきました。
姉上と遊びに来たのです。
「三十郎遊びに行くわよ、そしてこっちにいるのが私の新しい妹であんたにとって姉にあたる勝三郎と私の小姓の犬千代よ、挨拶しなさい。」

そこには兄上と同じ位の歳の少女と私と同じかそれより年上の少女いました。
「初めまして、三十郎と申します。宜しくお願いします義姉上。」
「こちらこそよろしく私は池田勝三郎よ、三十郎ちゃん、私の事はお姉ちゃんと読んでね。」
「三十郎ちゃんって、そしてお姉ちゃんですか？」
「駄目かな？」
「いえ、良いです。おっ　お姉ちゃん。」
「かわいいわね、私は妹か弟が欲しかったのよね。だって吉姉さんと勘十郎兄さんしかいないからね～。」
義姉上が回想しているのを見ていると
「犬千代、前田犬千代」
口数が少ない娘なんだ前田犬千代？、ああっ後の前田利家公か
「初めまして犬千代殿姉上のことよろしくお願いします。」
「自己紹介も終わったし行くわよ。」
「何処にですか？姉上」
「津島に行くのよ、三河の松平家から今川家に人質になるはずだった娘を父上が奪ったみたいだから見に行くのよ。」
やはり、このような事については史実どうりなのだなと思っていると、
「何してるの、置いて行くわよ三十郎。」
すごすごと歩いていく姉上に池田殿と前田殿
「あっ、姉上待って下さいよ。

「ところで兄上は何処にいるのです？」

聞いてみるのですが姉上は
「どうせ母上の所にいるのでしょ。」
と不機嫌そうに言いました。
まずい事に事態は悪化していることを実感して考えていると

「それ～掛かれ」

義姉上の声が聞こえたと思って振り向くと擽られました。

「ワハハハ、何をするんですか義姉上！」

「お姉ちゃんでしょ、三十郎ちゃん。辛気くさいよ」

「別に何でもありません義姉上。」

「だからお姉ちゃんだって。」

「着いた。」

前田殿の声が聞こえてきて前をみるとにぎやかな港町がみえてきました。
ここが津島か、ここをおさえることで父上は力をつけたのだな。と思っているとそれらしい船がみえてきました。

そこには、父上がいて姉上を見つけると驚いてました。

「吉法師そこで何をしておる、それに三十郎もなぜおるのじゃ」

「あっ、父上これにはいろいろありまして。」
焦っている私と
「それよりも松平の人質はどこなの。」
何処吹く風という姉上をみて父上は呆れたように
「そこじゃ、三河の松平広忠殿の嫡子竹千代殿じゃ」
言う方向を見るとびくびくしている子狸のような女の子がいました。
「あんたが松平家の人質ね、私は吉法師よこれからあんたは私の家来よ」
姉上、初めて会った人にそれはないと思うのですが。
まぁともかく自己紹介をしておきましょう。
「お初にお目にかかります。そこにおられる吉法師姉上の弟の三十郎と申します。」
「私は池田勝三郎よ。」
「犬千代、前田犬千代。」
それぞれ自己紹介を終えて
竹千代殿を見ると
「わっ私は、竹千代ですよろしくお願いします。」
と挨拶していました。
これが清洲同盟に繋がるのかと思う私でした。

## 信包、竹千代に会う（後書き）

ご意見やご感想をよろしくお願い申します。

## 信包、家臣を得る（前書き）

主人公の信包のオリジナルの家臣団を作ってみようと考え投稿させて頂きました。
史実と異なりますがご了承ください。
いろいろと至らないこともあるとは思いますが暖かい気持ちで読んで頂ければ幸いです。

## 信包、家臣を得る

竹千代殿との初対面から数日後、私は父上に呼び出されました。

「何故お前は津島に来ていたのか？」

「姉上から松平家の人質を見に行こうと誘われました。
私もどのような人物か気になりまして津島に行きました。」

「そうであるか、
しかしお前もいずれは、姉である吉法師を支えてをいかなければならない。わかるか三十郎。」

「はい、わかりかます。」

「そうであるか、ならば軽はずみな行動を自重せよ。
それはそうとお前に紹介したい者がおる入れ。」

父上がそういうと二人の女性が部屋に入って来られました。おとなしいそうな女性ともう一人については数日前に会いましたけど。
「この者達はいずれはお前付きの家臣となる者、こちら娘は佐久間信盛と申す。お前の教育係をやってもらう。
そこの娘はお前も知っているだろうが、儂の義理の娘でお前にとって義姉である池田勝三郎じゃ、お前の小姓となる、三十郎挨拶をいたせ。」

「織田三十郎と申します。よろしくお願いします。」

「私は佐久間信盛です。こちらこそよろしくお願いします三十郎様。

」

「お久し振りだね、三十郎様。
私は二度目だけど、改めて私は池田勝三郎だよ。
よろしくお願いします。」

「三十郎、しっかりと勉学や剣術を学び織田家を支えていくのだぞ。
」

「はい、分かりました父上。」

それから私は佐久間殿から兵法などを学び、池田殿には剣術を学ぶことになりました。

私生活では佐久間殿には家族の悩みを聞いてもらったりして頼れるお姉さんという感じがしました。

義姉上は姉上と非常に仲が良く、私を一緒に追いかけ回して遊んでいます。
私がお姉ちゃんと呼ばないと不機嫌になり、泣きそうになったりと大変なこともあるけど一緒にいると安心できるお姉ちゃんだと感じがしました。

私は大切な家族を得ることが出来たと感じました。

## 信包、家臣を得る（後書き）

ご意見やご感想をよろしくお願い申します。

**信包、雪合戦をする。（前書き）**

いろいろと至らない所もあるとは思いますが暖かい気持ちで読んで頂ければ幸いです。

## 信包、雪合戦をする。

私は勉学と剣術を学びながら姉上や竹千代殿と遊ぶ機会が増えました。

大抵は姉上か池田殿に付き合う形なのです。そして、そんな時限って私か竹千代殿が姉上達に追いかけられるという感じなのです。
そんな中の出来事をお話致しましょう。

それは竹千代殿が尾張に連れて来られた年の冬のことなのです。
城内でいつものように竹千代殿が姉上に捕まり狸鍋にされそうになっている所を犬千代殿が池に竹千代殿を落として助けようとしています。
しかし、こんな冬空に池に落とされたら風邪をひいてしまいますね、ここはひとつ助け船を出しましょう。
その為には、佐久間殿たちに協力してもらいましょう。
佐久間殿に目配せをして、それを佐久間殿が理解して頷いてくれました。

「あっ！あんな所ににわとりが飛んでいます姉上。」

「何処にいるのよ三十郎、そんなのいないじゃない　。」

「あれ、いたのですが。おかしいですね？」

「ああっ！！竹千代がいない、三十郎あんたのせいよ、どうするのよ。」
さすがは佐久間殿ですね。
竹千代殿を連れて上手く逃げられたみたいですね。

「雪だね、信奈姉さんそうだ雪が積もったら雪合戦しようよ。」

義姉上助かります。

「え～何なら木刀を使った合戦ごっこの方がいいわ。」

時々、我が姉ながら恐ろしいと思います。

「そうだ、兄上をさそいましょう姉上。」

「そこまで言うのならいいわ。負けないわよ」

よし、話を反らす事ができました。

「明日のお昼を食べ終わったらここに集合よ、遅れたらお仕置きだから。」

言われた時間にみんな集まりました。

だって姉上のお仕置きが怖さを知っていますから、さすがに遅れられませんでした。

「さぁやるわよ、万千代に犬千代」

「御意。」

「犬千代も頑張る」

やる気満々の姉上と犬千代殿達と

「なんでぼくがこんなことをしないといけないのかな。」

「勘十郎様頑張りましょうよ。でも姉君である吉法師様もかわいいなぁ～林殿そうは思いませんか？」

「あまりはしゃがないでください柴田殿。そして我々は勘十郎様付きだと言うことを理解してください。」

あまりやる気のない兄上とやる気の柴田殿とそれを宥める林殿がいました。

「そういえば初めてだったわね、この娘は丹羽万千代よ、犬千代と共に小姓をしているの。
三十郎挨拶をしなさい。」

「お初にお目にかかります。織田三十郎と申します。以後よろしくお願い申します。」

「三十郎さま、よろしくお願いします。ごあいさつは丁寧で良かったですね、９０点です。」

丹羽殿は人の行動に点数を付けられる人だったみたいです。

「ありがとうございます丹羽殿。」

「ぼくからも紹介するね、三十郎。
こちらの元気いっぱいの娘が柴田勝家でこちらのおとなしい娘が林秀貞だよ。」

「お初にお目にかかります。私は織田三十郎と申します。柴田殿に林殿以後よろしくお願い申します。」

「あたしは柴田勝家、よろしくお願いします。」

「私は林秀貞です。よろしくお願いします。」

一通り挨拶を終えて雪合戦が始まりました。雪で陣地をつくり其処に両軍が旗を置き雪玉を受けたら戦死扱いとなり退場となります。そいて大将に雪玉を当てて討ち取るか全滅させるか敵本陣の旗を奪い陥落させれば勝ちと言うルールとなりました。

一回戦は姉上と兄上が戦いました。

竹千代殿もこの雪合戦を見に来ており私は戦況がどうなるか尋ねました。

「多分とは思いますが吉姉さまのほうが勝つと思います。」

「何故、竹千代殿はそう思われるのですか？」

「確かに勇猛な柴田さんはいますが林さんや勘十郎さんが上手く柴田殿に合わせてくれないと勝つのは難しいと思います。」

さすがは野戦を得意とする徳川家康公ですね。

「なるほど、参考になりました。」

序盤においては竹千代殿が言ったように柴田殿が先陣を切り兄上が有利な展開となりました。

ですが、兄上は本陣から出てこず林殿もなかなか連携がとれなくなってきました。
そうして姉上と柴田殿と一騎討ちの時に柴田殿が動きを固まりその隙を突き万千代殿と犬千代殿に雪玉を食らい退場しました。
その後は各個撃破して竹千代殿の予想どおり姉上が勝利しました。
二回戦は兄上と私が戦いました。

兄上の戦いの感じだと後方で指揮を取るタイプみたいですね。
上手く分断出来れば勝てそうですね。
作戦どおりに柴田殿の攻撃をかわしながら佐久間殿が誘導してくれたため柴田殿を比較的簡単に倒し後は数有利を生かし勝利を得る事ができました。
決勝戦は姉上とすることになりました。
姉上は前線に出てくると思われ、受けて立とうと思います。
雪玉を投げて牽制します。

「では佐久間殿と池田、援護をよろしくお願いします。」

「わかりました。」

「まかせてよね。あとお姉ちゃんだから三十郎ちゃん。」

「わかりました。前向きに考えておきます。」

そして姉上と対峙しました。

「よく来たわね三十郎。これで決着付ける覚悟はいい？」

「私も負けるつもりはありませんよ、姉上こそ覚悟は良いですかそれではいきますよ。」

「犬千代やった、姫さま。」

犬千代殿が私の陣にあった旗を持って来ました。

「これはやられましたね。確かに雪玉の弾幕が薄いとは思いましたが悔しいですが私の敗けです。姉上おめでとうございます。」

「三十郎も頑張ったと思うわ、まさか一人で攻めて来るとは思わなかったから。」

「ありがとうございます。」

「なんじゃもう終わったのか？
どうだったのじゃ吉法師。」

「私が勝ちました。」

「吉よくやりました。でも少しはおしとやかになったほうがよいぞ
「母上来ていらしたのですか。」

姉上が驚いています。まぁ珍しいものがみれたので良しとしましょう。

「佐久間殿に池田殿すみませんでした。せっかくの勝機を逃しました。」

「良いですよ、しかし敗戦の責任は取らねばなりません。」

「責任ですか？仕方がないですね。何をすれば良いですか。」

「勘十郎様から聞きました。なんでも三十郎様は女装が上手いとか。」

「違います。あれは兄上がやったこと私にはそのような趣味はありません。」

「そうですか。しかし見たいですよね勝三郎殿。」

「そうですよね佐久間殿。じゃあ始めようか三十郎ちゃん。」

「慎んでお断り申します。」

「駄々をこねてはいけませんよ三十郎様、では勝三郎殿よろしくお願いします。」

「義姉上、何をなさるのですか。」

「諦めが肝心だよ三十郎ちゃん。」

「諦められませんよ、離して下さいよ。イヤァァー」

私の黒歴史が一ページ増えました。

**信包、雪合戦をする。（後書き）**

ご意見やご感想をよろしくお願い申します。

## 信秀、勇躍する（前書き）

今回は独自の解釈で話を進めさせて頂きます。
至らない所もあるとは思いますが暖かい気持ちで読んで頂ければと思っております。

## 信秀、勇躍する

ここでは私の父上である織田信秀の尾張統一までの戦いの軌跡です。
それは私達が雪合戦をしてから2年の月日が過ぎました。その間に
姉上は元服されて織田信奈となられました。
名前は信長で無いことには驚きましたがいい名前だと思いました。
その年のある日私達が朝食を食べている所に父上の家臣がいきなり
入って来ました。

「申し上げます。尾張守護の斯波義統様が守護代の織田信友様から
逃れて参りました。」

「なんじゃと、で義統様は何処におられるのじゃ。」

父上は慌てて部屋を飛び出して行きました。
その後、私達は城の大広間に呼び出されました。そこには貴族風の
美しい女性がいました

「こちらのお方はこの尾張の守護を務められておられる斯波義統様
じゃ、挨拶をせい。」

「お初にお目にかかります織田信秀が長子の織田信奈にございます。
」

「織田信秀が嫡男織田勘十郎でございます。」

「織田信秀が次男織田三十郎でございます。」

「ところで義統様は何故に織田信友から逃れられたのですか。」

「今日、古渡城に来たたのは、織田信友が信秀殿を暗殺を企んでいることを伝えに来たのです。それを伝えに行こうとしたら信友に軍勢を差し向けられたのです。」

「やはり信友がそのようなことを考えていましたか。」

確かに織田信友は信長暗殺を考えてそれを密告した斯波義統は信友に殺されたはずですね。まさか父上である織田信秀を暗殺しようとするとは、そして密告した斯波義統は生きて古渡城に来られた史実とは違うのですね。

「ご安心を義統様、謀反人の織田信友を討ち果たしましょう。」

「分かりました。期待してますよ信秀殿。」

斯波義統様はとても嬉しそうにしています。

その後、織田信友との戦いに勝ち信友は追放されました。

そして斯波様が清洲城に帰る日に父上と別れる際に斯波様はこう言われました。

「私と共に清洲城に来て、私の変わりに尾張守護を務めてくれませんか」

「申し訳御座いませんがそれはできません。私は斯波家の家臣でございます。」

斯波様は悲しげな表情をされていました。

「仕方がありません分かりましたわ。
ところで信奈殿は信秀殿に似ておられますね。信奈殿は立派に織田家を率いてくれそうですね信秀殿。」

「信奈殿、たまには清洲城に来て私とお話し相手になってくれませんか？」

姉上は少し戸惑っていましたが

「分かりました斯波様。」

「ありがとう信奈殿また会いましょうね。」

そういって嬉しそうに斯波様は清洲城に戻られました。

その後、父上は自身や斯波様に対立する勢力と戦い尾張を統一していきました。

尾張の統一後に父上は尾張守護代となりました。

その後姉上は、斯波様から茶の湯を学んだり色々な話をされたそうです。

その様子を見ていた父上曰く、本当の親子みたいだったそうです。

## 信秀、勇躍する（後書き）

ご意見やご感想をお待ちしております。

## 勘十郎元服する。（前書き）

コメディを織り混ぜて話をつくることが難しいです。

いろいろと至らないところがあるとは思いますが暖かい気持ちで読んで頂ければ幸いです。

**勘十郎元服する。**

父上が尾張守護代に就任されてから、1年後に池田殿と兄上が元服されました。
名前を池田殿は池田勝三郎恒興に兄上は織田勘十郎信勝となられました。

池田殿は少し面倒くさそうにしていました。
兄上の凛々しい姿を見て織田家の女性陣が黄色い声を上げていました。

父上と母上は満足そうに見ています。
嬉しそうに姉上は兄上を何か言っていました。
しかし、兄上は急に不機嫌になりました。

気になって兄上に話を聞きにいきました。

「兄上、どうしたのですか？」

「やぁ三十郎、別に何でもないよ。」

「私にはそうは見えないのですが。ところで姉上はなんて言っていたのですか。」

「立派よ信勝、これからは織田家の一員として頑張りなさい。だって」
「良かったじゃないですか兄上、姉上が励ましてくれたのですよ。」
「僕はうつけの姉上に励ましてもらっても嬉しくないよ。」

「うつけ？」

「三十郎は知らないのかい？、織田家の家臣の中には姉上のことをうつけっていっているんだよ。」

「何を言っているんですか兄上、
姉上は学問や剣術は優れていると思うのですが。」

「確かにそうだけど・・・
僕でも時々姉上の行動が理解出来ない、それに母上は僕に織田家の家督を継ぐように言われた。」

「兄上はどう思っているのですか？」

「僕にはわからないよ・・・
だって母上が僕に織田家の家督を継ぐように言われたから。」

「それは兄上の意思ではなく母上の意思だと思うのですが。
それに兄上と姉上は仲が良かったじゃないですか。」

「それでも僕は母上の期待に応えたい、そして姉上に勝ちたいんだ。」

「姉上に勝つ？」

「姉上は僕より何でもできる。そして何一つ姉上には勝てないんだ、だから僕が織田家の当主となって姉上より優れているところを示したい。」

「それはいけません兄上、その様ことになれば尾張は混乱し、他の大名が尾張に攻めてくるかも知れません、ここは姉上の下で結束すべきです。
それに父上は姉上を跡継ぎとして考えています。
それを変えるのは難しいでしょう。」

「難しい事は勝家や秀貞に任せて僕にはやらないといけない使命があるのだよ三十郎。」

まさか天下統一とかですか兄上はゲーム的には難しいでしょうが歴史好きとしては見たいと思います。

「兄上の使命とは何でしょうか？」

「僕の使命はういろうを尾張の特産にして全国に売り込んでいくことだよ。
どうだいすごいだろう。」

すごく残念な気分にさせられました。
尾張に特産が増えることは良いのですが。
それで乱世を乗り越えていくのは難しいでしょうが兄上にきつい事は言えませんし、お茶を濁すとしましょう。
「織田家の当主を継ぐことはともかくういろうを売り込んでいくことは尾張の為になると思いますよ兄上。」

「そうだろう、僕が織田家の当主になることが尾張の為になる。よし決めたよ僕が織田家の当主になる、ありがとう三十郎。」

兄上はなにやら勘違いされているようです。

「兄上！織田家の当主ではなくういろうを売り込むことは良いと言うことですが。」

「なんだい、僕が織田家の当主になった暁には然るべき役職を与えるつもりだよ、安心するといい。」

「私はそういう事を心配している訳ではないのです。」

「そこに居たの信勝に三十郎。」

「あっ姉上！では失礼します。」

兄上は気まずくなったのか足早に去って行きました。

「どうしたのですか姉上。」

「これから宴会があるから勘十郎に女装して踊ってもらおうと思ったんだけど、まぁいいわ三十郎あんたが踊りなさい。」

「なぜてすか私が女装しないといけないのですか姉上。」

「面白いと思ったのよ、それにそこにいる娘達が是非ともって言うからね。」

「佐久間殿に義姉上、そして林殿まで。」

「まぁ何でも良いからやっちゃいましょ。」

何てことを言うですか姉上

そして何だかんだで踊らさせた私と

「似合っていますよ三十郎様。」

「似合ってるよ、三十郎ちゃん。」

嬉しそうに見ている佐久間殿に面白がっている義姉上

「勘十郎様とは違うけどこれはこれで良いかも。」

興奮している林殿がいました。

我が織田家では女性陣には勝てないと思いました。

**勘十郎元服する。（後書き）**

ご意見やご感想よろしくお願いします。

## 竹千代との別れ（前書き）

いろいろと至らないところがあるとは思いますが暖かい気持ちで読んで頂ければ幸いです。

## 竹千代との別れ

私が兄上に変な誤解を与え不和を拡大させてしまってから数ヵ月後に父上は美濃に出兵しました。

斎藤道三殿に美濃を追放された守護大名の土岐頼芸様を美濃の守護に復帰させることを大義名分として出兵したのです。

初戦において勝利を収めた織田軍は斎藤道三殿の居城である稲葉山城を包囲をしますが父上が率いる本陣に斎藤軍が奇襲をしかけ、織田軍は総崩れとなり大敗を喫することになりました。

父上は命からがら古渡城に帰って来られました。

後に姉上の傅約の平手政秀殿の外交努力が実を結び後に帰蝶殿を姉上の義妹とすることで講和がなりました。

父上は美濃攻略を諦め拠点を古渡城から末森城に移し本格的に三河攻略を推し進めていました。

それに伴い私も母上や兄上とも末森城に移りました。

姉上はそれまで通り姉上の居城である那古野城に居られました。

それから、しばらくして姉上と兄上は父上と共に三河攻略に出兵したのです。

父上は安祥城を落としそこを拠点に今川軍と激戦を繰り広げられました。

しかし織田家にとって予想外のことが発生しました。
同じ織田家の一門衆の織田信広殿が今川家に捕らわれたのです。
私はこの事を知っていながらに何もする事ができませんでした。
その時の私はまだ元服もしておらず織田家においてまだ発言力は皆無でした。
その後、今川家との交渉で竹千代殿との人質交換が成立しました。
別れの日に姉上と共に竹千代殿を見送りに行きました。
「竹千代達者でね。」
姉上は泣きそうになるのを堪えてぶっきらぼうに言っていました。
「じゃね竹千代、がんばれ」
犬千代殿はとても寂しそうです。
「竹千代殿、頑張ってくださいね。」
万千代殿は励ましていました。
「竹千代様、お身体には気をつけてくださいね。」
心配そうに佐久間殿は言っていました。
「これから竹千代ちゃんと遊べないのか～寂しくなるなぁ～でも悲

しんでもいられないね、じゃね竹千代ちゃんがんばるんだよ。」
なんとも義姉上らしい別れの挨拶です。
最後は私ですか
「私も竹千代殿いなくなることは寂しいです。ですがいつか私達は竹千代殿とまた楽しく話すことができると信じています。ですからそれまで竹千代殿お元気でお過ごしください。」
「みなさんお見送りありがとうございます。わたしもみなさんの事は忘れません。」
竹千代殿も涙声でした。
「では、竹千代様こちらに」
「わかりました半蔵。」
私は半蔵と呼ばれた青年に何か引っ掛かるものを感じ竹千代殿に尋ねました。
「竹千代殿、此方の方は？」
「こちらは松平家の家臣の服部半蔵正成です。」
なるほどこの人が有名な忍者なのですか。
「服部半蔵正成と申します。」
「こちらこそ、私は織田三十郎と申します。」

「どうしたの三十郎。」

「いえ姉上、ちょっと気になったものでしたので。ところで半蔵殿、竹千代殿のことよろしくお願いします。」

「承知しました。」

そして半蔵殿に小声づこう言われました。

「小僧、俺のことを知っているようだな、言えばわかっているな。」

自分の身分を知られると竹千代殿に類が及ぶと思ってのことからでしょうね。

「ええ、分かりました。

それと服部殿は今の松平家をどう思われますか？」

「それはどういう意味だ。」

「例えば三河の独立とか？」

「くだらん、それに仮に独立したとして織田と今川に挟まれ独立を保つことは難しい。小僧と話をしたのが間違いだったみたいだな。」

武将としての確かな戦略をもっているみたいですね。

「そうですね仮に、今川義元殿が討たれるようであるならどうでしょう？」

「織田軍はその今川義元に負けたいずれ尾張に攻め落としにかかる
そして、尾張が落ちれば三河の独立あり得ない」

「織田軍の損害は安祥城は落ちましたぐらいです。
迂濶に尾張に攻め込めば今川軍は手痛い損害を被るでしょうね。
そして、今川家も武田家や北条家に背後を空けて尾張に攻めること
はできないでしょう。
それに、今は無理でも姉上が尾張を纏めれば無理でもないでしょう
ね。」

「うむ、お前は何故このようなことを俺に話すのだ。
織田家には得るものがないではないか？」

「いえ、織田家にも得るものがあります。
今川が破れたら武田家は駿河や遠江になだれこむでしょう。
それを防ぐことは織田家では難しいでしょう。
我が織田軍と比べ三河武士は忠義に篤く精強であるから同盟を結ぶ
ことができれば武田軍と対抗できると思ったからですよ。
それに私は貴方が竹千代殿や松平家のことを真剣に考えていること
がわかって貴方ならこの話を理解することがができると思ったから
です。」

「まぁ俺はなにも聞いていない、いいな小僧。」

「ええ良いですよ服部殿。
では失礼致します。」

これで三河との繋がりを得ることが出来ました。

こうして竹千代殿たちは尾張を去って行きました。

「どうでしたか半蔵～織田家のみなさんは～」

「はっ姫さま、織田三十郎には油断は出来ぬと思います。」

「三十郎さんは油断できませんか。少し残念ですね～」

「姫さまそれにしては嬉しそうですね。」

「分かっちゃいましたか半蔵。その方が面白いですよ。」

## 竹千代との別れ（後書き）

ご意見やご感想をお待ちしております。

## 信包、元服する（前書き）

暖かい気持ちで読んで頂ければ幸いです。

## 信包、元服する

竹千代殿が尾張を去ってから1年の月日が過ぎ、私も１２歳となり元服の日を迎えました。

私は衣装に着替えを済ませて氏神の前で父上が烏帽子親となり私に烏帽子を被せて頂きました。

そして私の名も幼名の三十郎から織田三十郎信良となりました。

元服の儀式が終わり私は城の大広間に行きました。

母上は私の姿を見て微笑みながら声を掛けてくださいました。

「立派になりましたね信良。

母上と泣いてついて来たことが懐かしいですよ。

信良、あなたも織田家の男子としてしっかりするのですよ。」

怪しまれないように演技をしたわけですが。やはり恥ずかしいですね。

「それは昔のことではないでしょうか母上。

さすがに恥ずかしいですよ。」

そこに姉上が来られました。

母上は姉上に目を合わせると母上はすごすごと近くにいた兄上のもとに行かれました。

「どうされたのですか母上！！」
突然の事で私は気が動転してしまいました。
そうして姉上の方をみると、姉上は寂しい眼差しを母上に向けていました。
しばらくすると姉上は気を取り直して私にこう言われました。
「三十郎、あんたにこれをあげるわ。」
そういうと姉上は真新しい瓢箪と石を頂きました。
「これは何でしょうか姉上。」
「これは飲み水を入れる為の瓢箪と火を起こす為の火打ち石よ大切にしなさい。」
母上の行動に戸惑っている私に対して、姉上なりに私のことを気遣ってくれたのでしょう。
そう思うと目頭が熱くなってきました。
「姉上ありがとうございます。」
「別に泣かなくても良いじゃない？」
私は少し恥ずかしくなって
「えっ！あれ本当だ、姉上からこのようなものを頂いて凄く嬉しいのです。」
「デアルカ。」

そう言われると表情を明るくされて犬千代殿達のところに行かれました。

他にもいろいろな方からもいろいろなものを頂きました。

丹羽殿から歴史書や兵法書を頂きました。

犬千代殿からはうこぎの葉を頂いてその葉で本の栞を作りました。

そのお礼を言いに行った時に実は食用だったことを知らされて恥ずかしい思いをしました。

柴田殿からは味噌が送られました。しかし私は料理をする機会が無いため城の台所で使って頂くことにしました。

義姉上からは弓を頂きました。

義姉上曰く私には剣の才能はあまり高くないらしくそれよりも弓のほうが良いとのことでした。

佐久間殿からは小袖を頂きましたが明らかに女性ものだったのです。

佐久間殿には後でお話が必要な気がしました。

一番驚いたのは父上から朝廷に働きかけて頂き上野介という官位を頂きました。

確かに姉上が元服されたときには上総介で兄上は武蔵守を頂いていたのですが、まさか私まで頂けるとは思いませんでした。

こうしたものを頂いて私は父上や皆様の期待に応える男になりたいと思うようになりました。

## 信包、元服する（後書き）

ご意見やご感想をよろしくお願いします。

## 尾張の虎、織田信秀死す。（前書き）

暖かい気持ちで読んで頂ければ幸いです。

**尾張の虎、織田信秀死す。**

私が元服してから数ヵ月の月日が経ちました。
私はかというと義姉上から頂いた弓の練習をしていました。
そこへ姉上が来られました。
「そこに居たの三十郎、あんたに良いものを見せるわ。」
そう言うと姉上は後ろから何かを取り出しました。
「これは何か分かる三十郎。」
それは前にいた世界の歴史の教科書とかで見たことがある物でした。
「種子島ですか姉上。」
「知っていたのつまらないわね。」
「ところで姉上どうしてここにおられるのですか？
姉上は那古野ではなかったのでわ。」
「父上に呼ばれたのよ、何か知らない。」
「いえ、知りませんでした。」
「そうなの、なら良いわ。」
そこに父上の家臣の方が来られました。

「申し上げます、殿が倒れられました。
信奈様と信良様には殿の下に来るようにと御前様が仰られました。
さぁ、こちらです。」

「分かりました。行きましょう姉上、姉上どうしたのですか？」

姉上は呆然とされていました。
しかしすぐに我に戻られました。

「わかったわ、行くわよ三十郎。」

「はっ、分かりました姉上。」

私達は家臣の方に連れられて父上がおられる部屋に行きました。

隣の部屋では父上の回復を願って祈祷が行われていました。

私達が父上の部屋に入るとそこには先に部屋に入っていた母上と兄上がそこに居られました。そして次に目に飛び込んだ光景に私は絶句しました。
今朝まで元気だった父上が苦しい様子で横たわっていました。
微かに父上は目を開けられました。

「おおっ信奈に信良来たか、お前達に言っておきたい事がある故に土田御前にそなたらを呼んでもらったのだ。」

父上は呼吸を整えられこう言われました。

「儂はもうそれほど長く生きれまい。」

母上は慌てこう言われました。

「何を気弱なことを仰るのですか？
織田家を天下に知らしめるのではなかったのですか。」

「自分のことは自分が一番知っておる。
それに儂の意識がはっきりしている、今のうちに儂の意志を伝えておきたい。」

「信奈よ、儂の跡を継ぎ織田家を率いよ。
そして、斯波様を支え尾張を守っていくのだぞ。」

姉上はじっと父上の話を聞いています。ですが涙を堪えている様子です。

「信勝と信良は兄弟仲良く姉を支えていくのだぞ。」

私は涙を堪え頷きましたが兄上は父上の話を聞いている途中で泣かれました。

「土田御前よ、子供達を頼んだぞ。」

母上は涙ながらにこう言われました。

「分かりました信秀様。」

父上は今後のことを言われました。

「信奈は那古野を西に備えよ、信勝はこの末森で今川に備えよ、最

後に信良にはかつて儂の居城の古渡を治めよ良いな。」
私は驚いて父上に尋ねました。すると父上は私を耳元に呼び小声で話をなされました。
「信良よ、信奈を心よく思っておらぬ者がおる、その者が信勝を擁立するかも知れぬ、そこでお前には信奈を支えて欲しいと思っておる。」
「父上お言葉ですが姉上には守役の平手殿が居られます。
それに私が姉上に味方するかはわからないと思われます。
そして私はまだ元服したばかりです。古渡をうまく治められるか自信はありません。」
「政秀は気に病む癖がありそれに儂よりも齢を取っている。
いつまでも信奈を支えられん。
それにお前は信勝より信奈ほうと仲が良いと聞くよもや信勝には付くまい。領地を治めるには家臣の者の話を聞き必要なことを考えたならばうまく治めることができる。
信良よ、自信を持つのだ。」
「はい分かりました父上。」
「そうか、もう儂に思い残すことは無い」
そう言われると再び瞼を閉じそれから数日後に息を引き取られました。
その日には部屋から出る気になれませんでした。

このままではいけないと思いました。
そして私は父上の思いに応える為に姉上を支えていこうと決意したのでした。

## 尾張の虎、織田信秀死す。（後書き）

ご意見やご感想をよろしくお願いします。

## 波乱の幕開け（前書き）

久しぶりに更新させて頂きます。

いろいろと至らない所もあるとは思いますが暖かい気持ちで読んで頂ければ幸いです。

## 波乱の幕開け

父上が亡くなった翌日に城の大広間で父上の葬式が執り行われました。

父上の代からの重臣の方々や他の織田家の方々も来られていました。

その方々からは今後の織田家についての話が聞こえてきました。

兄上や母上は父上の死を悲しんで泣いていました。

私まで泣いてばかりは居られませんので涙を堪えて来られた方々の対応をしました。

しかし、喪主である姉上の姿を見つける事が出来ませんでした。

そこに平手殿が酷く焦ったご様子で来られました。

「おおっ信良様、姫様をご存知では御座いませぬか？」

「いえこちらには来られて居ませんよ平手殿。」

「このような大事な時に何を考えているのか、姉上には困ったものだ。」

兄上が嘲笑されていました。

そこに姉上がいつもの服装で来られました。そして父上の位牌の前に立たれると姉上は末香を位牌目掛けて投げてどちらかに行かれました。

母上や兄上は呆然とされていました。

平手殿は重臣の方々の対応をされていました。

式が終わり私が大広間から出てしばらく歩いていると何処からか声が聞こえました。

「そこの御仁助けてくだされ、私達は信秀様の祈祷をしておりました僧でございます。突然織田の姫様に閉じ込めらました。」確か信長公は父上の回復を祈祷をした僧を殺したような気がします。

姉上には人を殺して欲しくはないですが、扉が厳重に閉じられていて自分だけでは無理なので誰かに助けを求めに行きました。

私は急いで大広間に戻り平手殿に事の次第を伝えて閉じ込められていた僧の方々を出す手伝いをしてもらいました。

数日後、姉上に姉上の城に呼ばれました。

そういえば姉上の城に行くのは初めてでしたね。

姉上の城に着くと姉上の自室に来るようにと家臣の方に言われ部屋に行くと姉上は不機嫌な顔で手羽先を食べておられました。

「あんたね、僧の場所を教えたのは？」

「はいそうですが、何か問題でもありましたか？」「勝手なことしないでよ。」

「では聞きますが姉上、あの後何をなさろうしたのですか？」
姉上は少し焦ったご様子でこう言われました。
「別に良いじゃないそんなこと。」
「平手殿から聞きました。
あの建物に火を付けようとしましたね姉上。
そんなことをしても父上は喜びません姉上。」
「あんたは父上が亡くなっても悲しくないの三十郎。」
「悲しく無いわけない無いです。
ですが私には父上の遺志を守り姉上を支えていく為には泣いてばかりでは居られません。」
「でもね三十郎、重臣達には勘十郎を当主にしたがっている連中がいるそうよ、あんたはどうなのよ勘十郎とも仲が良いじゃない？」
「確かに兄上のことは私にとっても大事な家族です。」
「ですが私が見たところ兄上は家臣にすべて任せてご自身では何も考えておられませんでした。」
「この乱世の世において兄上は織田家を率いて行けるとは思えませんでした。」
「それにひきかえ姉上は家臣の意見だけではなくご自身で方針を考えて行動されている、だから私は姉上の方が織田家の当主にふさわしいと思いました。」
「おだてても何も出ないわよ、わかったわちゃんと支えるのよ織田信良」

初めて名を読んで貰えた気がします。

「はっ、全力を挙げて支えさせて頂きます姉上」

姉上との話を終えて末森城に帰り古渡城に引っ越しする準備をしている最中に兄上に呼ばれました。

姉上と兄上の対立は避ける為に頑張らねばならないと思うのでした。

## 波乱の幕開け（後書き）

多分この作品は不定期で更新すると思います。

ご意見やご感想を頂ければ幸いです。

## 信包の初陣（前書き）

久しぶりに投稿出来ました。
拙い文章ですが暖かい気持ちで読んで頂ければ幸いです。

## 信包の初陣

私達は兄上に呼ばれて兄上のいる大広間に行きました。
そこには女装をした兄上がいました。

「何をなさっておられるのですか兄上。」

「何って変装だよ、昔は一緒にやっていたじゃないか三十郎。
また、一緒にやろうじゃないか。」

思い出したくないのでに断ることにしました。

「やりませんよ兄上、ところで何故私達はここに呼ばれたのですか？」

「そうだったね、秀貞話してくれたまえ。」

兄上を嬉しそうに見つめる林殿は急に真面目な表情をされこう言われました。

「今日ここに来ていただいたのは大事な話がありましてお呼びしました。」

私も気になって聞き返しました。

「大事な話とは？」

「信良様は織田家の当主には信奈様がふさわしいと思われますか？」

私は迷わずに言いました。

「はい姉上は、織田家の当主にふさわしいと思われます。」

すると兄上は驚かれていました。

「何を言っているんだい三十郎、きみも見ただろう父上の葬儀での姉上の行動。あれの何処に織田家の当主がふさわしいんだよ。」

「確かに姉上は破天荒なことをなされますが、この前姉上の領地に行ってしばらく滞在して私は姉上こそ織田家の当主にふさわしいと確信しました。」

林殿が聞かれました。

「どういうことですか三十郎様」「姉上の領地では街道などが整備され城下町も活気に溢れていました。

それに街の人達に話を聞くと姉上はとても親しみやすい殿様だそうです。

そのような姉上だからこそ織田家の当主にふさわしいと思いました。」

兄上が何か言われようとされましたがそこに柴田殿が来られました。

「申し上げます信勝様、織田信友殿の元家臣の坂井大膳が亡命中の織田信友殿を担ぎ出兵し清洲城は占領されて守護の斯波義統様は幽閉された模様でございます。

それで信奈様は信勝様にも出馬をするようにとのことです。」

兄上はつまらなそうに

「え～ぼくは行きたくないな～、勝家、ぼくの代わりに行ってきて」

「はっ承知しました。」
そういうと出ていかれました。
私達も部屋を出ようとすると兄上は
「何処に行くのだい三十郎、まだ話は終わってないよ」
「すみません兄上、私も戦の準備がありますので今日の所は失礼します。」
そう言うと私達は兄上城を出ました。
翌日に姉上から同じ内容の書状が届きました。
私達は戦の準備を始めました。
私は父上から戴いた南蛮胴を身に纏いました。
父上の遺言状には古渡城とその周辺2万石を治めるように書かれていました。
織田家の軍役では1万石当たり300人を指揮するようになっていました。
その為私は600人の指揮を取ることになりました。
まず部隊を二つに分け佐久間殿に200人の部隊を預けて城の守備について貰いました。
そして私と池田殿は、400人の部隊と共に姉上の居城である那古

野城に向かいました。

そこで軍議が行われました。

軍議では私達が敵の主力である坂井軍と戦っている間に私達の叔父である織田信光殿が清洲城に強襲し奪回するということになりました。

私達は那古野城から出陣し庄内川を渡り萱津にて坂井大膳の軍と戦闘になりました。

序盤にて坂井軍の先鋒の坂井甚介を柴田殿と犬千代殿が協力して打ち破り戦況は我が軍が有利になりました。

私達も池田殿の勇戦されました。私も佐久間殿より教えられた兵法を参考に何とか戦線を維持する事が出来ました。

先鋒が打ち破られた坂井軍は動揺し浮き足だっているみたいです。

姉上がいる本陣から突撃の号令を出しました。

私も指揮している部隊に号令を出しました。

「私達も敵陣に突撃します。」

この突撃によって坂井軍は混乱したみたいで前線が崩れ始めました。

前線が崩壊した坂井軍は敗走を始めました。

姉上は敵に追撃をかけずに私達や柴田殿に本陣に集結するようにと命令を出しました。

姉上は先鋒の将を破った柴田殿と犬千代殿を褒めていました。

「六に犬千代よくやったわ、これは褒美の金平糖よ食べなさい。」

「有り難き幸せ。」

「ありがとうございます姫様」

二人とも嬉しそうです。

「勝三郎も三十郎も頑張っていたわね、褒美のういろうよ食べなさい」

「ありがとう信奈姉さん。」

私も義姉上に合わせて

「ありがとうございます姉上。」

伝令が本陣に入って来ました。

「申し上げます、織田信光様が清洲城を奪回した模様でございます。」

姉上は慌てて伝令に質問しています。

「斯波殿は無事なの？」

「ごっご無事でございます信奈様。」

姉上は安堵の様子でした。

そして全軍に号令を出しました。

「本当に良かった、これより清洲城に向けて進軍」

私も自陣に戻る途中に丹羽殿から呼び止められました。

「信良様、大丈夫ですか？」

「丹羽殿どういうことですか？」

「信良様の顔色が優れないご様子で気になったので」

私も戦わないといけないと理解していたつもりだったのでしたが

「ご心配をお掛けしてすみません丹羽殿、ただこの戦いが終わって私はむなしく思ったのです。」

「虚しい？」

「何故同じ織田家の者同士が戦わなくてはいけなかったのか、このような戦いはいつまで続くのかを考えてしまうのです。」

「信奈様は初陣の時に戦いの終わった戦場を見て、私にこのような時代を終わらせると仰っていました。だから私も信奈様が作る世の中を見てみたいと思って戦っているのですよ。」

姉上は織田家や尾張の為だけではなく日本のことを考えていらしたのですか、私はまだまだだと思います。

「ありがとうございます丹羽殿、私も吹っ切ることが出来そうです。

そして私も姉上の作る世を見てみたいと思いました。」

「元気になられたようですね。
それに信良様には笑顔の方がお似合いです、８２点」

まさかそんなことを言われるとは思っておらず驚きながら
私は姉上の為に頑張って行こうと思うのでした。

## 信包の初陣（後書き）

戦い描写を表現することが難しいと思いました。
ご意見やご感想をお待ちしております。

## 姉上、国主になる（前書き）

暖かいお気持ちで読んで頂ければ幸いです。

## 姉上、国主になる

萱津での戦いに勝利し、姉上率いる織田軍は奪回された清洲城を目指し進軍を開始しました。

柴田殿が指揮する部隊が前衛を務め、私達の部隊は後衛となりました。

部隊の指揮する私に義姉上が話を掛けてきました。

「三十郎ちゃん、初陣では頑張ったねお姉ちゃんとして鼻が高いよ。」

「ありがとうございます義姉上、ところで私はまだちゃん付けなのですか？」

「うん、三十郎ちゃんは永遠なのです。」

義姉上に普通に呼んで貰うことを諦め行軍に集中することにしました。

私達が清洲城に到着すると信光殿が出迎えて下さいました。

信光殿は二十代後半だそうです。

私の信光殿に対する第一印象は頼れるお兄さんという感じがしました。

「おっ来たな信奈、斯波殿がお待ちだぜ。」

「であるか」

「兄貴が言っていた通りなったな、正直に言えば今回の戦いはお前がこれ程やるとは思ってなかったぜ。」

「ずいぶんな言い様じゃない信光。」

「今の織田家の連中にはお前のことはうつけとしか思っていないからな。」

「あんたはどうなのよ信光。」

「兄貴の葬儀の時は驚いたが、俺はお前がうつけとは思ってないぜ」

信光殿はそう言っておられました。

姉上と信光殿は親友のような感じがしました。

「信光殿は姉上と仲がいいのですね。」

「昔は勝三郎や犬千代と一緒によく遊んだな、鷹狩りとか種子島を使って射的をしたよな信奈。」

「そうだったわね夢中でしたもんで平手のじぃに弾や火薬の無駄遣いだって説教されたわね。」

姉上と信光殿は本当に仲が良いのだと思いました。

久しぶりに前いた世界のことを思い出しました。

彼は私の数少ない友人でした。
歳の離れた私にも気兼ねなく話してくれました。
彼は女の子に優しく仲間想いでした。
「信長公の野望」をプレイしたり歴史談義をしたのがとても懐かしいです。

もうひとつ気になっていたことを信光殿に質問をしました。

「織田信友殿は何処におられますか？」

「いや分からねな、清洲城に着いた時には斯波殿しかいなかった大方は美濃に逃げたじゃないか？」

史実では信友殿は信光殿に攻められ自害したはず
やはり少し私が知ってる歴史とは違っているようですね。

そして私達は大広間にて斯波様と対面しました。
斯波様は心労の為か少しおやつれになっておられました。

「信奈殿に信光殿、此度はお助け頂き感謝致します。」

姉上は斯波様に挨拶をされました。

「斯波殿がご無事で何よりです。」

斯波様は頷いておられました。そして私にも声を掛けて下さいました。

「良く駆け付けて下さいました信良殿。」

「そのようなお言葉を頂きありがたく存じまする。」
「そのように畏まらなくても良いのですよ信良殿。」

「はっ。」

斯波様は辺りを見回して柴田殿に声を掛けられました。

「ところで柴田殿にお尋ねします。
信勝殿は来られてませんねどうかされたのですか？」

「えっ！それはですね・・・・・」

柴田殿は若干困惑されているようです。
まさか兄上が面倒だと言う理由で来られないとは言えないようです。
いささか柴田殿がつらそうでしたので助け船を出すことにしました。

「兄上は急に病に掛かりまして此度は出馬が難しく柴田殿を名代となされました。
私はその時兄上の城に居りました。
そうですよね柴田殿。」

「えっ、そっそうでございます。」

「それは大変でしたね、信勝殿には十分養生してくださいとお伝え下さい。」

「はっ、承知つかまつりました。」

しばらく談笑をした後に斯波様は姉上に話を切り出されました。

「信奈殿に頼みたいことがあります。
私の代わりに尾張の守護大名になって貰いたいのです。」
姉上は黙っておられます。
見守っていた信光殿が口を開きました。
「お前らしくないじゃないか信奈、斯波殿もこう言っていることだし守護になっちまえよ。」
「簡単に言わないでよ信光、そんなことにしたら斯波殿に危害が及ぶかもしれないじゃない。」
「それはお前が守ればいい話じゃないか、それに俺や信良もいる、俺達がしっかり支えてやるよ。」「そうですよ姉上、私も微力ながら支えさせてもらいます。」
「信奈殿、私はあなたのことを実の娘のように思っています。
その娘の為になら命を惜しみません。
あなたが語ってくれた夢を叶える手助けをさせてくれませんか？」
しばらく考えられた後姉上は
「わかったわ、斯波殿に私の理想の世界を見せてあげる。」
「ありがとうございます信奈殿。」
それから数日後斯波様は正式に姉上に守護職を譲ることを宣言されました。

信光殿が後ろ楯になられ守護職の継承は滞りなく終わり姉上が正式が守護職に就かれました。

姉上は守護の政務をする為と隠居された斯波様を守る為に守護所である清洲城に入られました。信光殿は周りに睨みを利かせる為に姉上の居城であった那古野城に入られ尾張支配を確立されました。

これにより姉上の天下統一が始まるのでした。

## 姉上、国主になる（後書き）

ご意見やご感想をよろしくお願い致します。

## 姉上の誕生日（前書き）

暖かい気持ちで読んで頂ければ幸いです。

## 姉上の誕生日

姉上が守護職に就かれた後、私達は清洲に滞在して尾張の方針を決めることになりました。

当分は外征を行わず国境の防備を固めその間に尾張の国力を蓄えることとなりました。

具体的な役割は信光殿が国内にいる不穏分子に睨みを効かせつつ外敵の来襲の折りは迎撃の指揮を取るという事になりました。

私には領地にて兵を整えることと佐久間殿の主導で三河の武将に対する調略工作が任されました。

兄上には兵を整えることを柴田殿に伝言されていました。

評定の後に清洲城の二の丸に与えられた屋敷で今後の事を池田の義姉上と古渡から来て頂いた佐久間殿と話し合っていると家臣が入って来ました。

「申し上げます、織田信光様が来られております。」

「信光殿がですか？」

こちらに近づく足音がし信光殿が部屋に入って来られました。

「邪魔するぞ信良」

要領を得ることが出来ず信光殿に質問をする事にしました。

「今日はどのような用件で来られたのですか信光殿？」

信光殿は陽気に笑いながら

「あいかわらずかたいな信良、せっかく清洲に来たんだしよ、街巡りにいくぞ。」

佐久間殿が反論をされました。

「これからの事を協議しなければならないのです。お引き取りを願えないでしょうか信光様？」

「まぁ確かに今は大事な時だ信盛、しかし今頑張り過ぎて倒れたりしたら本末転倒だ。」

「それに信奈の誕生日も近いし皆で飲み食いして親睦を深めようってわけだ。」

「あっ・・・・・」

「まさか忘れた訳じゃないよな。」

「仕方がないじゃないですか、今年はいろいろと大変だったのですから。」

「確かに大変だったよな、でっどうする信良。」

「姉上の贈り物を考えなければいけませんね、分かりました信光殿行きましょう。」

佐久間殿は諦めたようにため息をついて
「仕方がありませんね、分かりました支度をしますね。」
「ありがとうございます信盛殿」
すると信光殿がこう切り出しました。
「そこでだ信良、お前と信盛に頼みがある。」
「頼みですか？」
「信奈に渡す贈り物を贈り物を見繕ってもらえないか頼む。」
「何故女性である佐久間殿ならともかく私にも頼まれるのですか？義姉上でもよろしいのではありませんか。」
「勝三郎は無理だな。」
「酷いな信光くん、私でもちゃんと選べるよ。」
「なら聞くが俺の誕生日に何を送ったんだよ。」
「えっとね確か虎かな？」
そんなの何処で売っていたのか考えていると
「そうだよ危うく喰われかけたじゃねかよ。」
「え～でもかわいいよ虎」

「大変だったんだよ飼い慣らすのによ。
そんなのを選びそうなお前は外したんだ。」
「それに信良が兄貴に送ったキセルはなかなかの代物だったからお前なら間違いないと思ったんだよ。」
「まぁとにかく行こうじゃねか」
「そうですね。」
こうして私達は清洲の街に出掛けました。
さすがは尾張の守護所がある街で津島程ではないのですがにぎやかな街です。
私達はそれぞれに姉上の贈り物を決めました。
そして信光殿に頼まれた贈り物を見繕うことにしました。
佐久間殿との話し合いの結果着物にする事にしました。
「これは信良様に似合いそうですね。」
「姉上の着物ですよ佐久間殿、それに私は着ませんからね。」
そして私が佐久間殿に別の着物を見せました。
「これはどうでしょうか、良いと思うのですが。」
「確かに桜の花が鮮やかですね良いと思いますよ信良様。」

「そうだなこれにするか、店主これを頼む。」
「旦那分かりました。でどちらにお届け致しましょう？」
「清洲城に頼む」
「はっはい分かりました、お代はこちらになります。」
値札を見た信光殿は少し固まった後で私達を呼びます。
「信良、お金余っているか？」
「はぁ若干残っていますがどうしたのですか？」
「少し貸してくれないか？」
予定した金額を越えたのでしょう、しかし私も選んだのですから仕方がありませんね。
「分かりました出します。」
「そういうことなら仕方がありません、私も出しますね」
「済まねぇなちゃんと帰ったら返すからよ。」
支払いを済ませて私達はそれぞれの屋敷に戻りました。
数日後に清洲城に姉上の誕生日を祝う為に行くことにしました。

そこには斯波様を初め織田家の方々が居られました。
しかし兄上や母上は来られてはいませんでした。
今回も代わりに柴田殿が名代で心なしか柴田殿は所在無さげにされています。
「何かあったの急に大広間に呼び出したりして万千代。」
「来てみれば分かりますよ姫様。」
「待たせたわね、何があったの信光。」
「信奈様誕生日おめでとう（ございます）」
「何よ聞いてないわよ。」
「言ったら面白くないだろ、ここまでありがとうな長秀。」
「いいえそれほどでも、姫様も驚いておられますし大成功９０点」
姉上は部屋を見渡してがっかりされています。
犬千代殿は目の前にあるお膳を早く食べたいオーラを出しています。
見かねた丹羽殿が宴の音頭を取ります。
「姫様始めたいと思うのですが。」
「そうね万千代、今日は無礼講よ楽しみなさい。」
その言葉をきっかけに宴会が始まりました。

「姉上おめでとうございます。」

「姉さん誕生日おめでとう。」

「ありがとう信良も勝三郎」

そして姉上への贈り物を渡しました。

贈り物は私が髪飾りで義姉上は信楽焼の狸の置物でした。佐久間殿は茶入れを贈りました。

そして信光殿が姉上に着物を贈りました。

「あんたにしちゃあまともじゃない。」

「まぁざっとこんなものよ。」

「でもね姉さんこれね信盛ちゃんと信良ちゃんが選んだだよ。」

「馬鹿、何で言うんだよ勝三郎、そうさ信盛と信良に選んでもらったよ。」

「まぁそんな事だと思ったわよ、信光にこんな気の効いた物選べるわけないもの。」

「そうだよどうせ俺には気の効いた物なんて送れないさ。」

「でっでも、ありがとう信光。」

「けっ素直じゃねぇな。」

姉上と信光殿がそんな会話をしていました。
そんな光景をほほえましく見ている横目で柴田殿は一人でお膳を食べられていました。
心なしか表情は暗いようです。

「どうかされました柴田殿。」

「いいえ、何でもありません。
先日の事ではお助け頂きありがとうございます。」

先日の事?、ああっ兄上の仮病の言い訳の事ですか

「別に良いですよ。それに兄上の名誉を守ろうとされたのでしょう
柴田殿、こちらこそありがとうございます。」

「いいえとんでもございません信良様。」

「今日は姉上の誕生日を祝う為の宴、そんなに気を張らなくても良いのですよ柴田殿。
それに何か悩んでおられるなら話して下さいませんか少しは楽になると思いますよ。」

少しでも話易いようにとお酒を勧めました。
柴田殿は盃のお酒をぐいっと飲まれました。
そして柴田殿は日頃の鬱憤を話されました。

兄上が姉上に否定的な見方をする若武者達の意見を取り入れ姉上と親しい柴田殿の意見を取りなくなってきたことや柴田殿に隠れてな

にやら企みを行っていることなどでした。

いよいよきな臭くなってきましたね、ですが確証もなく兄上の家臣を罰する事は出来ません。

もしそんなことになれば姉上と兄上の亀裂は修復できなくなりますからね。

そんなことを想いを巡らせると柴田殿が

「聞いてます信良様、ですからね・・・・」

「聞いてますよ柴田殿、おや～？」

早い調子で飲まれたせいか柴田殿は酔って私の膝で眠ってしまわれました。

困って助けを求める為に周りを見渡すと平手殿が信光殿と飲み比べしています。姉上の方をみると佐久間殿と茶器についての談義に花を咲かせています。その光景を斯波様が慈愛に満ちた眼差しで見ています

義姉上が私の方を見て拗ねたように言われました。

「いいな六ちゃん～三十郎ちゃんに膝枕してもらってる。私もしてもらったこと無いのにずるい。」

「仕方がないですよ私が柴田殿にお酒を勧めたのですから。」

「いつか私もしてもらおっと。」

「何ですか義姉上。」

そんなことを言いながら私は平和な時が続けばなと思うのでした。

## 姉上の誕生日（後書き）

更新スピードが遅くなってきています。

自分の文才が無いことが辛いです。

## 過去への誘い（前書き）

久しぶりに更新できました。

いろいろと至らない所もあるとは思いますが暖かい気持ちで読んで頂ければ幸いと思っております。

## 過去への誘い

宴も終わり後片付けが始まりました。

平手殿と信光殿の飲み比べはというと平手殿の勝利に終わりました。

「今度こそは勝てると思ったのによ、悔しいぜ。」

「信光殿のようなひょっこにまだまだ負けませんぞ。」

私はというと柴田殿が途中で眠ってしまわれ只今柴田殿を膝枕しているのです。

強烈な尿意との攻防戦をしている次第です。

限界が近づいて来たので佐久間殿に柴田殿のことを任せることにしました。

「すみません佐久間殿、ちょっと厠に行きますので柴田殿のことをよろしくお願いします。」

「はい分かりました。」

佐久間殿に代わって頂きました。

そして私は全速力で厠に向かって走り出しました。

厠を済ませ大広間に帰る途中で庭を二人で歩いている斯波様と信光殿を見掛けました。

何やら懐かしそうに話されています。

私は二人がこちらに近づいて来たので思わず物陰に隠れてしまいました。

「懐かしいな義統殿、貴女が守護についた以来だな。」

「そうですね。」

「兄貴と平手のじい様が酔って取っ組み合いの喧嘩をして大変だったな。」

「ええ、それ以来信秀殿は平手殿に対して絶大の信頼を寄せていましたね。」

「確かにその後信奈が産まれてじい様が守役となったんだよな。」

「そうだったのですか。」

あまり夢中で聞いていると後ろの方から声を掛けられました。

「何しているの三十郎。」

「うわっ姉上、何故ここに?」

「あんたがあまりにも遅かったからじゃないの。」

「すみません姉上。」

「何を見ているの、何だ信光と斯波殿じゃない期待して損をしたわ。」

「どういうことですか姉上。」

「あんたは知らなかったけ、信光と斯波殿は付き合っているのよ。」

「え～～～！！」

「ばっ馬鹿ばれるじゃないのよ。」

「でも驚きですよ信光殿と斯波様が付き合っていたなんて。」

「馬鹿ね今まで斯波殿が名目上の尾張の守護大名だったのよ、そんなこと言ったら下克上としか見られないじゃない。」

「そうだったのですか。」

この乱世において自由な恋愛は出来ないのだ改めて認識させられました。

「何故なんだ義統殿、何故俺達がいっしょなれないんだよ。義統殿まだ兄貴のこと忘れられないのか？」

「いいえそんなことはありません。」

「だったらどうして？」

「ええっ～斯波様は信光殿と付き合っていて父上のことを想っている、頭が混乱してきました。」

「うるさいわね三十郎。」

「だって姉上、斯波様は信光殿と付き合っているんですよね？」
「そうよ、でも父上が結婚する前には二人は恋仲だったのよ。」
「それなら信光殿の言うとおり父上のことが忘れられないのでしょうか。」
「それはないはね、だって斯波殿を守護に復帰させた時に父上に想いを伝えたそうだけど、父上は母上を裏切れないと断ったみたいだし。
それを聞いて父上のことをあきらめたそうよ。」
「でも池田の義姉上の母上を側室にされましたよね？」
「それはねその年に勝三郎の父上が討死してその時幼かった勝三郎では池田家を支えるには心もとないとので父上が私の乳母だったことで勝三郎も自分の娘同然だと言って養徳院殿と相談の上に養徳院殿が側室になり父上が勝三郎の後見人を務めることになったのよ。」
「そうだったのですか。」
姉上に父上の話を聞いていると斯波様がおもむろに話を始められました。
「それはですね信奈殿の事です。」
「信奈のこと？」
「今日の信奈殿の誕生日に信奈殿の母上は来られませんでした。
母上を探す信奈殿を見ていると不憫で仕方ないのです。

ですから信奈殿の母親代わりとはいきませんが信奈殿の為に側に居たいと思っております。」

「そうか、それなら仕方ないな。
だけどまだあきらめちゃいないぜ。
それにしても兄貴も罪だよなこんないい女を置いて先にいってしまうんだからよ。」

「信光殿・・・・・」

姉上の方を見ると少し俯いておられました。しばらくして私達は大広間へと戻りました。
大広間に戻ると犬千代殿が筆で柴田殿の額に何か書いていました。
気になって見てみると柴田殿の額に牛の字が書いていました。
姉上は今までの暗い表情が一気に明るくなり大声で笑われました。
それに釣られ佐久間殿や丹羽殿も笑っておられました。

笑顔になった姉上の顔を見て私はほっとすると同時に母上との関係を何とか出来ないものかと思いました。

翌日に顔に落書きされた柴田殿は犬千代殿と1日中槍を持って鬼ごっこをしましたとさ。

それから数日清洲に滞在した後私達や柴田殿はそれぞれの領地に帰ることになりました。

## 過去への誘い（後書き）

拙い駄文ではございますがお読み頂き感謝いたしております。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9405t/

---

織田信奈の野望 織田信包伝

2011年12月8日04時45分発行